

ポンペイ、「黄金の腕輪の家」32室の壁画とその周辺  
——制作状況と図像プログラムの考察——

氷見野 夏子 (東京大学)

古代都市ポンペイからは、ローマ時代の壁画が大量に出土している。中でも「黄金の腕輪の家」と通称される豪勢な住宅は、庭園に面した31室と32室に、庭園の情景を壁画で模した庭園画が描かれていた。32室の壁画は特に質が高く、ポンペイで出土した庭園画の中でも最高のものの一つとされる。

先行研究では、この庭園画は同じポンペイのより質素な住宅「果樹園の家」の二部屋に描かれた庭園画と、技法やモチーフの類似から同一工房に帰属できるとされてきた。

発表者はこの31室、32室と「果樹園の家」の庭園画を詳細に比較し、樹木の描写の比較や鳥のモチーフにおける型紙の使用の有無に基づいて、31室と「果樹園の家」の庭園画では同じ画家の手が認められるのに対し、32室のみ画家が異なることを示す。さらに、32室が31室や「果樹園の家」の壁画よりも目立って質が高いことを指摘した上で、32室と31室、「果樹園の家」の庭園画との類似点をモチーフと構図の観点から整理する。結論として、「果樹園の家」の壁画画家が、31室の壁画を描く際に隣の32室の壁画を参照し、「果樹園の家」での壁画制作に反映させたのだと考える。先行研究では、互いに類似する庭園画の作例が指摘されるにとどまってきたが、発表者は画家の異同、描写の質の差、影響の前後関係という複数の観点から作品間の関係性を整理することで、より精密な議論の方法を提起することを試みる。

また、32室の壁画には、左右の壁に二つずつ、ヘルマ柱(頭部像が角柱の上についている形式の彫像)の上にピナクス(彩色大理石板)が載った、珍しい装飾モチーフが描かれる。ピナクスのモチーフは「果樹園の家」のうち一部屋でも描かれており、32室を参照したとみられるが、遙かに質が低い。32室では、ピナクスとヘルマ柱は壁画全体の図像プログラムの中で意味を持っていた。ヘルマ柱は少女の肖像を表すものと、半人半獣のサテュロスを表すものがあり、ピナクスにはいずれも横たわる女性が表されている。先行研究では、このヘルマ柱とピナクスのモチーフについて詳細な分析がなされてこなかった。発表者はこのモチーフに着目し、ピナクスの横たわる女性が、ポンペイ壁画の神話画に登場する眠るアリアドネ、および眠るマイナスの図像と酷似することを指摘する。その上で、左壁と右壁の間に次のような対照が認められると論じる。左壁ではヘルマ柱はローマ人の少女とサテュロス、ピナクスはティアラを身につけた王女アリアドネとキツタの冠を被るマイナスが併置されることで、文明と野生という二つの世界が対比される。また、真っ直ぐに伸びる植生と羽を閉じた鳥が静的な構成を示す。他方右壁では二つのピナクスが、いずれも服の乱れた女性を表し、対比よりも類似が示される。また、風に揺れる植生や飛び回る鳥が動的な構成を示す。文明と野生の対比は古代ローマの美術に広く見られる構図であり、庭園はその対立が調和される場だった。